

《研究ノート》

離島・島嶼における生活と農耕

— 地理・歴史・文化と経済・生活構造 —

長嶋俊介*

1 離島・島嶼の環境条件と農耕

島嶼とは島（四面水に囲まれた陸域）一般を指し、嶼はそのうち特に小さなものを指す。当然、島嶼のうちには大きな島もあれば、本土の一部であるかのように近接し、交通アクセス条件に恵まれたものもある。島嶼の中でも、交通体系上の疎外度が高いものが離島として称されている。遠隔の地にあるもの、小さいもの、港湾条件上の制約のあるもの、島・対岸都市双方の経済活動の水準が高くないものなどの理由があって「離島性」が形成されている。

一般に離島とは「隔絶性」「環海性」「狭小性」により条件付けられた、特徴ある地域性を有する空間である。離島での農耕には、当然それらの条件が影響を及ぼし、また自然的・地形的個性が反映していく。しかし農耕に関わる文化・技術・景観・作目などにおける特徴ある個性も、必ずしも絶対的なものではなく、通常の海岸・半島域との差でとらえると、かなり相対的なものとなる。つまり他に類を見出し難い、完全に独立した技術・文化体系として認定される「純粋離島型農耕」という類型区分にいれられるべきものはそれほど多くは存在しない。またその生業性も、社会・経済的条件により大きく変わっていく。島のインフラ条件も大幅に変わり（離島振興法の成立は昭和28年のことで、以来補助率嵩上げ、省壁を越えた一括計上予算方式で、公共事業を中心とする施策が

*ながしま しゅんすけ、奈良女子大学生生活環境学部

40年間に亘り積み上げられて来た)、本土との格差の是正も進みつつある。それらにより脱個性化も進みつつある。

とはいえ、それにしても島ならではの特有の共通事情と考えさせられたり、島毎に特徴的な個性と思わせるものがあるのは何故だろうか。技術的にはある部分は当初は他から学び、それがその地に残るのだが、そこに残っていく事情に上記地域特性も強く影響していくのであろう。また島だからまとまった個性として思えることもあるであろう。珍しさには、島のみ「残っている」珍しさ、島なりの個性的・適応的「工夫」と、地域単位としての「まとまり」方の個性とがある。それらが他者から見た、文化・技術・景観的個性として映し出されてくることとなる。

しかし軽視してはならないこととしては、「珍しさ」「個性」とみえるものの背景の探究である。それらは、問題・条件の深刻度がかなり違うということでもあり得る。風土的（歴史的・地理的・文化的）条件の違いに合わせ、独自かつ追加負担的な対応と工夫、努力により生まれた個性や「適正技術」であることも多いようにも思われる。それらは時として単純に現象的な珍しさに理解がとどまり、単なるラグすなわち遅れとして軽視されたり、場合によっては革新能力や意欲もなく古さを引き摺っているものとして見下されたり、貧しさゆえの珍しさや風俗として捉ええられることもある。しかし見方を変え、地域特性と生活の総体から見るとむしろ合理的で、モダン（現代的で未来にも引き継がれるべきもの）で、無理・無駄のない生活に根付いた独自性だったりもする。むろんどの地域よりも先駆けた新しい技術体系の開発と導入に積極的である地域も少なくはない。

今回はそのような離島・島嶼における多様な農耕の現状とその個性、文化、そしてその実態について、事例をもとに整理し総括的に見てみることにした。なお農耕そのものを目的とした専門的調査ではなかったが、実査地域は1993年7月末現在で、約980島に達している。国内では（小笠原諸島、トカラ列島、五島列島、沖縄の一部離島を除いた）ほぼ全域、外国では54ヵ国（国連の定める未独立地域を含める）の島々である。

これらのうち「島の事情」の反映した農耕上の特徴と問題点が顕著な事例について例記し、かつ概括的に紹介することとする。ここでは演繹的展開や島個性類型別の農耕論は避け、事例の中にかがえる離島性・島嶼性的事情を見てみる。国内事例のほうが見聞機会が多いので、まず外国事例を優先し、そして国内事例をそれとの関連性の範囲内で [] 書きし、そこでの島嶼事情の共通性、類似性を見ていくこととする。そのことにより、全体状況を把握したり、問題状況をより具体的に理解していきやすいようにした。島嶼的共通性や類似性の考察は、農耕技術・文化の限界地事例的である場合も多いが、時には先端地的な事例も含まれてくる。その多様性と特異（離島・島嶼的）共通性、一般的共通性のうち、前二者の多様性と特異共通性にとくに注目していただければ幸いである。

当然どこにでもあること、起こり得ることが、たまたま島で見られるという事例もある。島を舞台として、文化・歴史・地理的条件・偶発的条件などから、多様な帰結（multi-finality）を生み出していることもある。島はその意味で社会的実験の場でもあり得る。とくに国・地域を別にした比較においてはさらにそのことは顕著となる。

2 韓国離島・島嶼にて（1990年、93年調査）

（1）濟洲島事例

三多（風、石、女）の島といわれるほどの火山の島でかつ季節風が強い。家屋、農地の石垣は荒積み（個性的事例）である。風をまともに受けず、一部を通すことで倒壊を防いでいる。防風林もあるが、事例としては新しくかつ島内全域とはなっていない。

国内最南端の島であることで、唯一の蜜柑栽培地となっている。これのみで濟洲道民所得の14.5%もの比重を占めている。露地促成栽培のスイカや野菜栽培も、最南端飛び地 [cf. 同じく国内南端地の沖縄の果樹・園芸作物、八丈島の温帯最南端地としての露地もの観葉植物の丈夫で日持ちがよいことによる商

品価値の高さ]の有利性を活かしたものである。ただしかつてパイナップルとバナナの産地としても知られていたが、国際的競争力がなく(五島列島北の緯度であり)国内販売向けには今ではさすがに栽培されてはいない。

(2) ^{フンドー}莞島の無人島(属島)利用の事例

全羅南道の海は全韓国の62%の離島が集まっているところで、多島海ともいわれる。ただし人口規模が小さな島が多い。無人島1690もほとんど極小島だけからなるが、うち国有地・公有地が61.6% (面積でも55.3%)と多い。本土からの架橋島で中心島の莞島にある農業試験場では、小規模・無人島の特性を利用して、純粋種子採取と、農薬利用の程度差などによる病害虫発生度調査を行っていた。[我が国でも瀬戸内海で類似事例が1960年代よりある。]

[島の閉鎖的空間性を逆に利用した、害虫駆除手法もある。1972年沖縄県久米島で始まったウリミバエ不妊虫放飼法である。ウリ類のスイカ、ニガウリ、キュウリなど、果菜類のトマト、ピーマンなど、果物類のパパイア、マンゴーなどの大害虫で、コバルト60のガンマー線を照射することで雄を不妊化し、野生虫と交配させ、根絶を図った。1919年八重山諸島で最初に発見されて以来、全沖縄、奄美諸島まで広がった被害は、同地域の農業発展の最大の制約要因であった。約75年後の1993年秋いよいよ八重山諸島で最後の根絶宣言が出される予定である。植物防疫法による出荷制限の解除は沖縄・奄美の農業発展にとり、また世界的にも希なイノベーションな手法によるものとなった。]

(3) ^{ボギルドー}甬吉島事例

莞島から船で南に1時間ほどの離島。ここも風が強いので石壁の集落景観で有名な所である。洗濯物を載せて帰る婦人達は頭上運搬をしていた。林野率は86%と高く、石垣で作った傾斜地農地が多いが、頂上部まで耕作という状態ではなかった。

[日本では、石垣で作った傾斜地農地の事例は実に数多い。とくに、「耕して天に至る」と呼ばれた島々の景観は、瀬戸内を中心として他地域にも多かった。

そこまでして少ない耕地をフルに活用して来た。石垣農地の典型事例として特に印象的であったのは、倉橋島属島の鹿島、萩沖の相島、高知県の鵜来島と沖ノ島である。石垣のうえに島空間があるという感すら受ける。一部を例外として、離島農耕の柱は、かつては傾斜地農耕であった。]

周辺の島々一帯に共通するが過疎化の著しい島である。1973年8,533人、1985年5,481人と8年間に35.8%も減少している。当時地方自治停止状態の中で、中央主導的なセマウル（農村近代化・生活改善）運動展開中であったが、農村婦人の地位（とくに儒教的かつ直系家族制度下での嫁姑、若者の地位）問題があり、かつ農耕作業の女性負担とも重なり、若者減少の社会的要因となっていた。（因みに済洲島の場合は対称的に、核家族が伝統的であり、女性の経済的地位も高く、嫁不足問題はない。）

若者減少の経済要因として、農業所得の問題もある。専業農家5.2%、専業漁家5.0%、農・漁兼業77.3%、その他12.5%となっている。所得面ではワカメ養殖、ノリ養殖、漁業、農業の順で、農業所得の順位の低さが顕著である。その農業生産の内訳を見ると、88年頃の生産量で、米339トン、麦673トン、豆93トン、芋類1019トンと麦芋が主であり、野菜類としては白菜326トン、大根222トン、ニンニク130トン、ネギ96トンとまさに、キムチ・韓食文化対応的な生産構造となっている。いずれも自給食の延長型の生産体系である。畜産でも牛311頭、豚961頭、鶏1,044羽、山羊422頭と、とても企業的経営の段階にはない。

文化的には豊漁と安全を祈る行事と、豊作を祈る農楽でも有名な島であると、行政資料の特記事項に記されているが、農耕から養殖（海苔、ワカメ、アワビ、ナマコ）と漁獲（鯛、さわらなど）により比重が移っている。しかし養殖海面も海苔490ヘクタール、ワカメ610ヘクタール、アワビ60ヘクタール、ナマコ1ヘクタールと、島のほぼ全域をカバーし、さらなる拡大の余地は乏しい。そこにも行き詰まりを見る。

(4) ^{グイフクサンドー}大黒山島事例

西端の大漁業基地・防衛拠点・観光拠点（隣の紅島が景観に優れた自然保護地区）で、全国のイカ釣り漁船が集結する島である。訪問時はスルメ加工の最盛期で夜遅くまで働き詰めであった。出荷額では活魚が近年イカの2～3倍に急成長を遂げていた。黒山面（町）の有人島11島では、農家比率は22.7%（農家・非農家分類）である。耕地比率は7.2%、そのほとんど99%が畑である。

自給農産物作が中心で、港では干し昆布・ワカメ等と共に一部野菜等も売られていた。背負籠の中や、風呂敷の中から隠しながら取り出される野生菌（エビネ蘭の一種）には驚いた。密売なのであろう、カメラに撮らしてはくれない。（台湾離島の^{ランニウ}蘭嶼でも同じことがあった。）紅島に観光用の宿泊施設が十分でないこともあるが、観光による現金収入機会が、野生植物管理に危機的影響を及ぼし始めている。

[日本国内離島でも似た問題がある。エビネ蘭では伊豆諸島の大島・神津島・御蔵島・八丈島で、島外者が主犯だが、島内に一部協力者もかつては存在したという。いまは監視と植物園整備で意識変革をしているが、野生ものの稀少化という犠牲によって改善が図られたものである。]

[^{ランニウ}背負子、背負籠の文化は、傾斜地の適正技術そのものである。国内の山間部・半島部同様、島の農耕生活技術の象徴的存在である。大分県保戸島では極めて若い女性が日常品運搬用に港にまで背負籠を持ち込んで来ていた。農耕の知恵が傾斜地の日常生活に幅広く応用されている姿でもあった。]

3 台湾離島の蘭嶼にて（1989年調査）

台湾最南端の離島。フィリピン系の民族「裸族」が住む島。今もフンドシ生活が一般的で、住居は石垣で囲んで地下状の低地に構えている。放射性廃棄物貯蔵施設保障の近代住宅を与えても彼等はそこに住みたがらないでいる。通常は壁の無い2メートル位の高さの涼み小屋とで生活している。強烈な台風対策であろう。海岸部には運搬途中流失したのであろうか、皮を剥いである南洋材

の超巨木が多数放置したままであった。

観光化が進み、タバコねだり老女や、写真代ねだりの人も出始めているが、生活・農耕・漁撈のスタイルにまでは及んでいない。水田が多く、しかも相当広い。そのほとんどどこでもタロ芋が植えられていた。太平洋諸島のタロ芋はまさに、溝・低湿地利用であるのに対し、稲作用灌漑水田と変わらぬ技術（たぶん日本統治時代の影響であろうもの）をそこに見た。ただし、違いがあるとしたら、農耕棒の活用である。通常のは飾りもないものだが、観光用に漁船模型を作っている人の家には、飾りの付いた物が置いてあった。その模様は、特有の民族色の強い漁船の船体の飾りに類似したものであった。

4 カリブ海の島嶼にて（1979年，85年，88年調査）

（1）民族大移動と「飛び地」での農耕問題

「西インド諸島」は、コロンブス航海の後、西欧人入殖、原住民アラワク族・カリブ族の大量死滅化があり、かわってアフリカ系の奴隷大量導入（一部アジア系年季契約移民導入）の地域になった。その不幸な歴史がもたらした、農耕技術・文化に関わる問題や特徴も多い。それは今日に至るもなお農耕上の特徴の重要な背景をなしている。

まず①原住民伝統農耕を今日においては確認することは出来ないことがある。ドミニカ国（コモンウェルス）の北部山間部に、カリブ族の保護地域（彼等自身は「珍しい生き物視」否定からテリトリーと主張している）があり、一部耐強風構造をした地面近くにまで達する大屋根の伝統集会所の建設は外国援助で試みられているが、伝統農耕復活の取組みはなされていない。資料制約と技術格差、現在のライフスタイルの「近代化」も大きくあずかっている。

ついで②奴隷すなわち強制移民の農耕技術退化問題がある。奴隷として飛び地に連れて来られ、しかも自発性・内発性を奪い取られた民の、「失われた大地・知恵・技術」問題ともいえる事態が、独立以来2世紀を経てなお今日に尾を引いている地域がある（後述）。

③そのアイデンティティ問題から、アフリカ回帰宗教と抗人工食・抗文明食思想と結び付いた自然食農耕運動もある（後述）。

④プランテーション農業地域としての発展の歴史そのものの今日的状況も重要な農耕問題である（キューバの革命とその後の不振・構造転換の困難さ、東カリブのバナナ共和国的プランテーション経営・農薬散布問題……ただし他の中米諸国よりも土地所有問題の改善がより良く図られている）。

⑤アジア系年季契約移民達も、地域農耕に特徴ある影響を及ぼしている。トリニダード・トバゴは、人口の41%がアフリカ系で、40%がインド系、混血17%という構成になっており、インド系住民の存在により、カリブ諸島の中でもとりわけ野菜生産が盛んで、種類・量ともに豊富である。（太平洋諸島フィジーでも似た傾向がある。）

⑥中国系移民のいる地域では、白菜などの中華料理材料を、フロリダ半島から定期船で輸入しているところもある（バハマ、英領タークス・カイコス）。観光用の需要もあって成り立っている高コスト輸入であるが、熱帯農業展開の技術制約、規模制約もあり地域内での生産にまでは至っていない。

⑦カリブ島嶼は太平洋島嶼と異なり、地域特産農産物の種類が多様で、地域ごとに特色がある。また比較的近接しているので、相互の農産物交易頻度も太平洋諸島嶼よりは高い。

（2）農耕技術退化事例（ハイチ）

エスピノーラ島は、世界最初・最大の本格的砂糖プランテーションの大中心地であった。200年程前のアフリカ系奴隷の反乱・独立で、追い出された仏国系資本の投資先はキューバに向かう。残ったアフリカ系住民達は、資本と技術上の制約下に置かれることとなった。特に農耕技術・文化問題は深刻であった。

かつてアフリカの地で地域事情に適応して保持していた適正技術・文化の継承機会を、奴隷の子孫達は奴隷なるがゆえに失っていた。新しいその土地での「サブシステム技術・文化」形成の以前に、まず今日・明日の土地収奪的な

サバイバル生活の持続に追われていくことになる。焼き畑、伐採、人口増大の悪循環で、かつてのルーツ先祖達の技術以下の対応を繰り返していくことになる。その農耕を中心とする技術退化の延長上に今日の「西半球の最貧国」ハイチ共和国の現状がある。

そのことは同じエスパニョーラ島の東部のドミニカ共和国（旧スペイン植民地）と比較して見れば歴然としている。岩盤の露出したひどい山肌、土手の崩壊した農地、ひび割れた田畑の荒れ方、雑穀を主とした生産、赤く枯れかけたように勢いのない稲、木炭を主燃料とした暮らしぶりが、ハイチ共和国の山間部や郊外で展開されていた。都市の中は道幅は広くても舗装部が少なく、少し入ると中はスラムそのものであった。一方ドミニカ共和国での緑の豊かさや経済基盤の根本的な違いは、出発点とその後の教育・技術・投資・資本環境の違いの累積的な結果そのものを象徴している。農耕技術の退化は民族の自立と誇り、そして生存基盤そのものを基底的に破壊していったのであったのである。

（3）ラスタ・ファリアンの抗人工食・抗文明食とその農耕（ジャマイカ・東カリブなど）

ラスタ・ファリとは、エチオピアの故ハイレシエラシェ皇帝の名前である。ジャマイカ出身の米国でも活躍した政治家マークス・ガーベイが、「キリストの生まれ変わりを王とする黒人国家」のアフリカでの出現を予告し、故ハイレシエラシェが、神の再生として（当初）カリブに住むアフリカン達の信仰を集めることとなった。最大の問題はアフリカン達のアイデンティティ、ルーツ意識への影響の深さにあった。白人文化、キリスト教、宗主国帰属意識とは別の基準を持つことになる。

第三世界の代表的音楽（抗物質文明的なプロテストソングも多い）となったレゲエミュージシャンのほとんどがその信仰者であり、ジャマイカ・東カリブの人口の10～20%がその信者であるとされる。特有の髪形も特徴的だが、食文化、農耕上の対応も、特徴的である。

まさに、カウンター文明食・菜食主義の追求が根底にあり、①人工的過程を

経た食材料・飲み物の否定（工業化過程を経た物，添加物・着色物・加工されたものの他，輸入アイスクリーム，缶詰すらも否定。小麦粉も当然無漂白ものにこだわる。），②肉食の否定（これは個人差があるが，それぞれに原則を持っている場合が多い。獣肉食の禁止が一般的で，鳥を例外にしたりしている。）③魚については，うろこの付いた小魚は良いが，その他のものをタブーとしている場合が多い。④代替蛋白質は乳製品と大豆食品で補っている。大豆ハンバーグが彼等の一般の人向けの人気商品でもある。政府が生活改善運動で豆腐・豆乳の普及を図っているところもあった。⑤野菜生産も無農薬，有機栽培にこだわる。⑥基本的には自給自足にこだわるが，購入する場合も生産者，流入経路のチェックを厳しくしている。彼等独自の直接の生産者直結の流通経路を持つことが多い。徒歩とバスでの運搬という事例も希ではない。⑦食事準備も自分達のコンミュンメンバーでするなど，自炊へのこだわりが強い。男性の調理参加比率，男性独身者の自炊比率も高い。レストランで外食する場合でも，料理人に素材などについての要望をする。無理な場合はパンと野菜，果物，水という事例もある。⑧ガンジャ（大麻）の喫煙を神の薬として飲む者もいるが今では少数派である。⑨神の教えとして禁酒をする者が多い。⑩ハーブ類の使用量が多い。

彼等が作り販売するものは，無農薬なのでニンジン等の大きさは極めて小さいが，匂いが強く，生き生きとした葉をしていた。一方，地域外から入手しているものの品痛みは酷いものであった。彼等の基本問題は，蛋白質などの栄養量確保が十分でないと思われることと，近代医療の否定にあり，それらに関わる信仰と文化・文明とのラディカルな緊張関係がそこにはあった。

5 太平洋諸島にて（1981年，82年，84年，89年，90年，91年-1，91年-2，92年-1，92年-2調査）

（1）伝統農耕とタロ・ヤム芋文化

カリブとの基本的な違いは，伝統農耕とその文化の存在である。植物の各部

位に象徴的な呼称（家族関係，男女性など）を付けたり，男性性や女性性の象徴植物として扱われたりしている。豊饒性や子孫繁栄などの願い想いもそこにはあらわされている。

島と地域群によっては，文化の基底としての，ヤム芋文化が支配的なところと，タロ芋文化が支配的なところとがある。ヤム芋は男性性の象徴であることが多く，より馬鹿でかいヤム芋を喧嘩・競争相手に贈るという，ポトラッチ的な強制交換（負の贈与）により権威を示す手段としても用いられる（ポンベイ＝旧ポナペ島事例）。タロ芋は種類も多くそれだけ用途の多様性と想い入れも出てくる。種類が食物位階別に対応したり，病人食，儀礼食と対応したりしてもいる（ヤップ島事例）。

（2）「芋腹」の食生活文化とその変化

食生活文化の中心は，主食としてのヤム・タロ・キャッサバ・クッキングバナナ・ブレッドフルーツなどの炭水化物源である。これとヤシ（油，ミルク，果汁，芽株汁＝トディ），果物，魚，豚，鶏その他動物性蛋白質などである。

島によって重要食・作目のプライオリティがあるが，水利・交通条件・災害代替食品の幅・経済性・文化的行事へのこだわり度で，同じ文化圏・国内でも様々に異なる。中部太平洋のツバル国（政府調査）では，国全体では豚保有の優先度が最も高い。9島あるが首都島ではトディ，他の8島では作物2，豚保有3，コプラ収穫，トディ・コプラ，豚・作物と島別の事情・個性が反映したものとなっている（最も重要なもの，最も実利的なもの，最も関心の深いものを聞き，他の項目としては家畜保有，アヒル保持，野菜果物生産，特定できない，の中からの選択）。

栄養問題としてみるとき，「芋腹」の食生活文化とその変化は重要問題である。繊維質の多い芋を満腹するまで食べる文化は，過食にも節度のあるものであった。また，全体食を旨として，芋の茎や葉も野菜並みに用い，豚の血も内臓も皮や軟骨も食べ，命から命を得る食の体系をなしていた。これが舶来品＝輸入食依存，とくに欧米系の高エネルギー食品（麦，米，バター，ベーコン・ソーセー

ジ・コンビーフなどの食肉加工品、缶詰類)の導入により、過食と偏食を生み出すこととなっている。食品知識が十分でなく、素朴な舶来第一主義(魚缶詰の汁かけ御飯、即席ラーメンの接客食化)や、栄養バランス管理の知恵の接ぎ木も出来ず、ただ満腹基準をそのままにしていたのでは、さらなる肥満と栄養の偏りが生まれてしまう。従来以上に野菜の摂取が必要でも、熱帯での直射日光対策としての寒冷紗技術、病害虫対策、塩水・暴風対策、水利技術などの技術応用や、栄養知識の普及や新文化形成活動などのフォロー・アップが追いつかない現状となっている。隔離された空間の、急速な部分文明化に伴う文明病現象が発生しているのである(ミクロネシア各地、トンガ他)。

(3) ニュージーランドの「伝統農耕景観」と、環境主義イデオロギーとの突き合わせ

酪農・畜産国家ニュージーランドは、今や世界的な環境問題最尖鋭主張国として知られている。稀少動植物保護のための諸努力も展開中であつた。そのグレート・バリアー島の原生林、リトル・バリアー島のバードサンクチャー、その近辺のイルカ・鯨との共生地区を見ながら、むしろ本島の現在の大草原景観形成に至る歴史を振り返る必要性を感じた。

かつてのマオリ達の農耕は、しだ類と巨木(カウリの木など)の鬱蒼とした森林の中でサツマイモを中心としたもので、猛獣のいない地での採取・狩猟を主としたものであつた。その農耕秩序から変化してまだ新しい土地であることは余り知られていない。マオリ達の移住が800年~1,000年前で太平洋諸島の中で最も新しい(ポリネシア人大航海最後の先端地)人達であり、かつ英国の入植・植民地化の出発点となつたワイタング条約からわずか150年の歴史しかたっていないのである。北部で最も古い小学校でも100余年というところも多い。現在の原生林なき大草原景観は、その短期間での土地・動植物層破壊の産物ですらある。

そのような見方は、原住民主義的な偏りかもしれないが、「原始自然主義」や「生態系保護優先主義」のイデオログ達の足元の議論として、腑に落ち

ない身勝手さとも思えてくるのである。鹿・牛・羊・馬用の草原は、生存の必要悪で、鯨・イルカ（食文化と魚食資源確保のための資源調整）は必要悪でないとする論理飛躍もある。また過去のいき過ぎた土地収奪的開発（メラネシアとオーストラリアではその歴史的な土地権利の再調整の制度化が進みつつある）、自然破壊への反省、エコライフへの創造的な取り組み姿勢が仮にあるとしても、現状肯定の上の心情論的エコ追求姿勢の色彩が強いとも思われてくるのである。もし「伝統農耕景観」創造の試みがなされたとしたら、環境大国としての主張にも重みが増してくるであろう。自己の内なる痛みとの突き合わせは、環境問題を考える上で、万人の前提とすべきものだからである。

6 インド洋・インドネシアの島嶼にて（1990年、90～91年、92～93年調査）

（1）マダガスカル農耕文化・農耕事情

アフリカ東岸のアジア系人種島嶼、マダガスカル農耕景観としては水田と山地農業が印象深かった。元旦の平日並みの行事のない田植え風景、荷車・犁を引く瘤付き牛の多さ、地域単位の米自給政策のために設けてある県境のゲート・検問員の存在は、まさに経済警察的厳しさであった。

後者のそれは単に「民主共和国」体制（中国、北朝鮮、キューバと近い関係）にあるだけではなく、主食へのこだわりである。「世界一米が好きな民族」と自慢するだけあって、米へのこだわりが大きい。国全体としては生産量は増え続けている。1970年186万トン、1989年229万トンと23%も増えている。しかし、人口の増大もあって、国民1人あたり生産量は、1970年277.5kg、85年217.6kg、89年197.0kgと減り続けている。そこで、89年には7.3万トンの輸入をしている状況があった。経済不振の中でGDPの40%を越える農業の中の柱であるだけに、米問題はそれだけ深刻な国政施策を必要としているともいえる。

山間部で、火と煙りが目立つが、焼き畑状のそれとは異なる。育ちの早いユーカリを植林し、その林地に火を入れ、土をかけて木炭にしていた。道添いに俵

状にして売る他、市場では小皿の上に積んだ小売りまでしていた。それほど燃料事情にすら厳しい現状がそこにはあった。また、正月を前にした山間部の市場で目だったのが、生きたままの鶏販売と、養殖淡水魚であった。裸足、ぼろ着の生活の中にも、確保されている蛋白質確保のちょっとした贅沢さであった。

(2) モーリシャスの畑

モーリシャス（1968年英国より独立、1810年以前は仏国植民地）もマダガスカルと同程度の米の輸入国（89年91万トン）である。しかし人口はその10分の1で、しかも米・小麦とも生産統計値はゼロもしくはn.a.。輸出の6割が砂糖、2割が衣料。相手先の4割が英国、2割が仏国という、ポスト植民地・プランテーション経済である。（隣りのレユニオンはいまなお仏国の海外県である。砂糖が輸出の7割という構造は同じであるが、道路港湾等の整備具合、商品の出回り具合、農家景観の美しさ、生活水準に数ランクの違いを見る。独立・自立の国家経営の払う代償の大きさについても考えさせるものがある。）統計上は野菜類のトン数はさほどでもないが、ここもインド系住民が過半を越す地域であるだけに、市場では野菜類を多く見ることができた。

製塩の田が段丘状になっている。農耕上興味深い景観は、火山弾の3～5 m位もある小山が砂糖黍畑の中にでんと座っている、あるいは畑の境を縁取る堀として延々と続く光景であった。建設用資材としての利用はあっても、その余りにも量的な多さにそれ以上の対応は考えられないのであろう。もし機械力と経済力が日本並であるとしたら、その景観はもっと違ったものとなっているのであろうが、超長期に亘るローコスト適応が生み出した農耕景観である。

一方、経営体の確認は出来なかったが、山麓の傾斜の緩い、広いサトウキビ農園では車輪式放水車が数台あり、各々20メートル程先まで水を飛ばしていた。茶の栽培も一部始まっているが、新旧混在の農耕をそこに見た。

(3) スリランカの茶・稲作・淡水魚

スリランカの灌漑と水力利用の歴史は有名である。紅茶プランテーションの

ためのインドからの移民（タミール人）が長い国内対立を生み、北部と東部の（特に）山間部はいまなお部外者立ち入り危険地域として指定されている。バリケード、車止めの側に国軍の兵士を多く見た。牛、案山子などの田園風景は、さほど珍しくもないが、象の家畜としての利用には興味深いものがあった。また人造湖・灌漑排水路での漁業・洗濯・水遊びも、のどかさや水の豊かさ（それへの歴史的蓄積）を感じさせるに十分なものがあった。

輸出の1/3を紅茶と衣類が各々占めるが、ここ10年近く輸出・輸入相手先としての旧宗主国英国は5%程度でしかない。紅茶は米国のニューヨーク価格が（乱高下を繰り返しているが）重要である。第二の輸出農産物であるゴムは、1985年以来木の病気によるダメージがあったが現在は回復している。また多様な香辛料も輸出産品である。その一方、米・小麦・砂糖の輸入国としての現状に、農政・国政上の重い課題が象徴的に現れてもいる。

（4）バリ（インドネシア）の水利と社会秩序

島社会の安定的な豊かさを、バリ島に認める人は多い。豊かな水田と、毎日が祈りと供え物で始まり、年中祭祀（人生・生活・農耕に関わる）の絶えることのない暮らしぶり、そして文化的・芸術的にも一つの独立した島空間（周辺回教文化にたいし、ここのみ飛び地的にヒンズー教文化）を保持し続けている暮らしぶりがあるからである。

地域社会の暮らしぶりに観光等の錯乱要因が入りつつあるが、その伝統的安定さには、農耕文化要因が大きく寄与している。水利すなわち経済ネットワーク、宗教・祭祀ネットワーク、地域行政・町内組織ネットワークが同じ地域内構成員に対し多重的に覆っている。様々な最終的な問題解決は、他のネットワークシステムで調整するので、崩壊的・大変革的な事態に至る前に解決する。経済＝水利システムがセミ・クローズドな島社会維持の（経済外的な）安定化機能をも果たしている事例として重要である。

〔特殊日本の相互扶助制度＝経済内の安定化機能としての困窮島制度の事例がある。五島列島小値賀島、大島属島宇々島ほか3島あり、内容がそれぞれ若干

異なる。宇々島事例で紹介すると、大島で家庭事情その他で困窮者が出ると、順番に無人島の宇々島に送り、そこでの農耕と海草収集などの権利を与え経済的に立ち直る機会を与えるものである。享保飢饉後に始まり、1964年まで続いた。資料のあるものでの平均は5年、2家族同時定住が一般的であった。耕地は1.4ヘクタール、牛も放牧した。移住者は使用料として大麦4俵（のちに金納）を払うだけでよかった。税金と大島部落内の賦役年間50日分全てが免除され、生産に専念でき、帰島時には中程度の生活水準の家になっていた。比較的均質平等な社会での制度であったと考えられる。]

7 欧州の島嶼にて（1987年、88年、92年-1、92年-2調査）

（1）デンマークの離島サムセ

サムセチーズ発祥の島だが、今は本格的には生産していない。滞在型・別荘利用の観光と150年～200年程前からの伝統的農村街路・集落景観（白壁・木造・草葺の屋根でカラフル、アンデルセンのおとぎの世界そのものの中にあるような見事な景観）保存で有名な島である。

行政当局は観光のためにこそ、農耕景観の確保は重要と位置づけていた。働く人がいて自然と向き合っているから、人はそこを訪れるのだという位置づけをしていた。入り過ぎたら逆に規制し、また島の産業振興の柱として、エコロジカル・ファーミングを掲げていた。環境省の中に国土庁のあるこの围らしい地域農耕政策である。「農耕認識」を起点から問いなおしてくれる認識がそこにはある。

なお稀少動植物保存のためにも、（アン・ホルト島などを対象に）無人島化を防止するために起業化資本補助、定期航路船員宿舎建設などという定住奨励促進政策も採用している。

(2) スコットランドの離島ルイス&ヘリス島（アウター・ヘブリデス）とスペインのバレアレス諸島

ルイス&ヘリス島は、地域内の食料自給も確保されていない島である。自給はカブ、酪農、畜産（牛・山羊・羊の放牧）の一部のみで、草地は泥炭利用の溝が這い巡って特有の景観をなしている。議会会議室の隣りに調理室があり、伝統食を提供してくれたが、その食材料の自給部分は上述の極く一部にすぎなかった。

なお、カナヤエビの水揚げは国外（スペイン等への）輸出向けであった。まさに経済的国境がなくなりつつある地域の農耕の激変とも受け取れた。

[そのスペイン離島のイビサ島・マジョルカ島などでは観光需要が大きく、水産物の島内産は10%しか無く、アーモンド等の収穫にもジブシーが来ていたがこれも比較優位産業への特化により、下火になってきている。その世界的リゾート地の島の農耕の衰退は、文化的安定性の衰退問題の一つとして為政者達は憂慮の認識を示していた。]

(3) ギリシャ、レスボス島

生産者協同組合が力を持つが、地域農村婦人会組織の取組みにも補助が支給されている。オリーブとその加工品も見事であるが、農産物利用の商品開発力は、わが国離島の水準のほうが高い。

[わが国離島の農村婦人＝生活改善グループによる農産物等利用の地域特産商品の開発、有機農産物・無農薬食品販売の取組みは、世界的にも十分評価されるに値する実績を挙げている。]

(4) マルタ共和国

マルタ島、ゴゾ島ともに乾燥した黄色い大地であった。年間降雨量500mm。しかも夏季に集中している。塩田もある島である。井戸から水を汲み上げるための風車、乾燥土壌を守るための石垣、傾斜地の段々畑の石垣は、それぞれに特有の景観と見えるものがあつた。しかし耕地の中は荒れており、作物も少な

い。現国民と同数の人口が豪州とカナダに移民している。過剰な人口を支えてきた農地が、いまそのように枯れ、荒れている。

[カリブでも、スペインのバレアレス諸島でも風車を多く見た。塩田用は蓄電・乾燥用であるが、今はほとんど使われていない。]

英国海軍基地経済から離脱し、政権も西よりに変わった。しかし政府高官（大蔵大臣）の公式見解では、農業は比較劣位とみなし保護策、振興策に特段のものではなく、EC加盟申請に符合した、フリー・トレード（加工・中継貿易）と先端産業振興、オフショアバンキング、高付加価値観光業化に重点を置くと言うことであった。なお生活・産業目的に海水の淡水化に取り組んでいるが、そのために総発電量の24%を使っている。

土産用の国産葡萄酒は廉価であった。残念ながら味は値段相当であった。乾燥地農業の振興は国土保全に繋がるが、ここにも比較優位型市場経済優先論理が、持ち込まれている。

(5) シチリアのエオリア諸島、ナポリ湾のイスキア島

イタリアの離島はどこでも葡萄栽培と葡萄酒生産が盛んであった。ただし島内生産・流通に限定しているものがほとんどだが、それが旅行者に人気がありかつ高品質のものも多い。

エオリア諸島のサリーナ島は、かつては葡萄栽培のモノカルチャーで大産地であった。しかし、アフリカからの病害虫の伝播で壊滅的被害を受けた歴史がある。当時を忍ぶ段々畑の石垣が残っているが、その後遺症で産業構造転換を迫られた事例である。

ストロンボリ島は活火山の島で常時噴火を続けているが、居住地域のほうには溶岩流は来なくて観光と両立できている。かつては海運の島として栄えたが、100年前から農業の島、30～35年前から観光の島となった。ここも商品作物として葡萄と葡萄酒が主力であったが、いまは痩せ地の家庭菜園の域を出ていない。

[産業構造転換、人口流出、出稼ぎ、高齢化から、日本離島の段々畑は荒らし

作りか、耕作放棄になっているところが多い。戦後の引き揚げ者とその人口圧、食糧不足等で開墾した限界地の多くは耕作放棄地となっている。かつての芋雑穀畑であった天売島の傾斜地のササ藪はその典型例。一方小規模温暖離島で、女手の確保が可能な小規模漁業集落の近くの段々畑では、猫の額の大きさのところで自家菜園と自家用花卉栽培がなされている。]

イスキア島は高級温泉観光地だが、島の半分は今なお盛んな農業地帯で、傾斜地石垣農耕がなされていた。傾斜地中央部を走る道路の壁に倉庫が多く、ワイン蔵等として利用されている。戦争中抵抗組織の隠れ家ともなった。道無き斜面の倉庫から老人の出入りも目撃できたが、倉庫のおくに迷路、階段でもありそうにも見えた。とは言え狭い農地で機械の入りにくいところも多いが、観光と農業の共存が図られており、そのぶん島としての安定性を感じた。

8 まとめにかえて

今回は日本各地の島々の農耕の現状について、それを専らとしてはまとめなかった。古い資料や、個別の島単位の行政資料を整理してもよかったが、実際に調査に行った時点と現状とがかなり異なっている場合も多い。22年前から現地調査は続けているが、再訪機会を持ってないところも一部にはある。環境条件と生業の文化を農耕について語るには、地域ブロック毎にまとめ直す必要もある。農耕を専門とした調査でなかったので聞き漏らしもあろう。また仮に詳細についての記述には入ったとしても、特殊な個別地域事例の説明で終始しかねない（そのような話の種だけであれば数限りなく出てくる。そのなかには島嶼性と関わる構造的問題も多い。例えば隠岐牧畑の社会的構造・歴史的研究の事例紹介だけでも新たに一論文の書き起こしが必要となる）。

そこで、今回は本来の訪問・調査の目的である「離島性・島嶼性」にこだわり、その地理・歴史・文化条件と経済・生活構造の関わりについて総括的に見てみることにした。その相互の連関性と島嶼的事情の総括性にさらにこだわるために、国内の離島・島嶼からはその「離島性・島嶼性」の外枠と思われがち

な外国の島嶼・離島との比較視点を加えて見て捉えたものである。

島嶼・離島での農耕は、国・地域、歴史性、自然条件等で多様であるが、他の地域以上に「生活と経済の構造」を組み入れて理解しないと、断片的「珍しさ」理解に止まってしまうかねない。その方法論の必要性は、何も「島嶼・離島での農耕」理解に限定されるものではない。他の共通特定性のある地域、セミ閉鎖的空間、開放的空間の特定線引き内空間、それらの中での「農耕」特性を論ずる時にも、そこでの生活認識を基底に据えて捉える必要がある。生活はシステムであり、技術や文化もそこに位置づけて見るとき、具体的実践的理解は深まる。「農耕」の場合はさらに、そこに広義経済性、すなわち生活資源の総合性とそれとの調和、本来的循環の在り方との比較などの認識に位置づけられた見方が必要である。市場経済内的な経済認識から理解できることは、生活の一部に過ぎず、農耕も生活に根づいている以上、そのような生活経済認識からの理解が不可欠となるからである。いわば、十分条件の側から見ない限り、「地域理解」は不十分なものとなる。「地域」は、地域主義者の言説を待つまでもなく、「生活」のいま一つの生活基本単位だからである。島はそのことを最も端的に示す場である。「生活と農耕」をみることは、さらにその地域の足元・起点を見ることにもなる。離島・島嶼であればなおさらに然りである。